令和５年度
第２回丹後「子育ち」サポート協議会の概要

１　日時　　令和５年９月 18 日（月祝）　13:30～16:30

２　場所　　京都府立丹後海と星の見える丘公園及び波見川

３　出席者　　**丹後「子育ち」サポート協議会顧問**
　杉岡秀紀（福知山公立大学地域経営学部准教授）
丹後「子育ち」サポート協議会委員５名
　多々納智（京都府宮津天橋高等学校　教諭）
　野木俊宏（京都府立丹後海と星の見える丘公園　園長）
　櫛田啓（社会福祉法人みねやま福祉会　てらす峰夢施設長）
　関奈央弥（合同会社　tangobar 代表社員）
　廣野美穂（与謝野町中央公民館　公民館主事）
各市町教育委員会担当者４名
事務局（丹後教育局）

４　事業視察「丹ガキになろう！デイキャンプ」川遊び
（1）　子どもたちが川に慣れ親しむ時間
（2）　子どもたちが川の生き物を捕獲・観察する時間
（3）　記念撮影

５　協議の概要
（1）「午前の活動プログラムの概要について」
①　自己紹介・アイスブレイク
②　飯盒炊爨に使用する落ち葉や枝の収集
③　マッチによる点火体験と飯盒炊爨

（2）「活動プログラムについての趣旨説明」（野木委員より）
①　参加児童…丹後の２市２町から 20 名の参加（低学年 12 名　高学年８名）
※宮津天橋高校フィールド探究部の１年生部員がサポートスタッフとして参加
②　丹ガキ（丹後のガキ大将）とは
・人にも自然にも、そして地域にも思いやりがあるガキ大将
・どんな環境にも適応・対応できるというメンタリティとそれに見合うスキルを持ち合わせたガキ大将
③　活動プログラムの目的
・子どもたちの生きる力と思いやりの心の育成
・新人職員に対する丹ガキ事業の継承と事業運営力の育成

④　班編成

・１・２年生 12 人を３班、３～６年生８人を２班に編成。同世代同士での班にし、一人一人が安心感の中で自主的に動きやすくするねらいで編成した。

・友達同士での参加が多い場合に、多世代での交流をねらった班を編成することもある。

⑤　指導員の役割として

・子どもたちへ問いや投げかけを行い、子どもたち自身が考える機会を作る。

・子どもたちが失敗もしながら自ら体験して学べるように仕掛ける。

⑥　保護者の期待や願い

・人と人とのつながりをつくってほしい。

・正しく怒ってもらいたい。など

(3)「活動プログラム視察の感想」

①　川遊びについて

・どの子も川で遊べている印象を受けた。遊び方も自ら工夫し、遊びを創り上げている様子だった。

・安全への配慮がなされた中での学びにより、子どもたちの好奇心が得られていた。高校生の関わりも生き物等への関心を高めることにつながっていた。

・大人１人に対し、子ども２人なら見ることはできるが、大勢の子どもたちを一度に見るのであれば、大人の数も必要であり、安全面の保障が重要である。

・波見川のような体験活動に適した川がもっと身近にあればよい。

②　プログラム全体について

・上の学年から学んで下の学年の子が遊んでいる場面もあった。多世代だからこそできる学びがあった。

・経験することが大事。その積み重ねによって、「できる」というポジティブな行動にもつながる。

・「まず自由に遊び、水に慣れる。」「次に生き物を取る。」という順と２つの明確な目的により子どもの思考が動き出す。自己の中で目的、目標があることが子どもたちの活動を充実させる。

・体験を充実させるための知恵を大人が伝えてやることも大事なこと。

③　自然体験について

・学生の頃、７日間の無人島キャンプに参加した際、常に直近の食事のための活動をしながらも次の食事の準備のことを考えていた。そういったことは、体験してみないとできないし、体験しないと分からないこと。

・福知山市では、防災キャンプを実施している。キャンプは非日常だか、日常での学びにつながるメッセージにもなるのではないか。

・急な天候の変化で雷が鳴っていたが、子どもたちの中には気付いていない子どももいた。自然体験だからこそ、安全に対しても敏感になる経験もできる。

(4)「子どもの主体性と対話を引き出す環境設定について」

① 自然体験の効果について

・環境の中に自然現象として常に変化が起こっている自然体験は、子どもたちの考える力につながる。一方で、日常は決まったことの繰り返しになり、考えずとも体が動く状態になりやすく、思考が停止してしまう。

② 主体性を引き出す環境設定について

・詳細に設定しきらず、あえて余白をつくることが主体的な思考につながる。

例）給食などの食事の機会をビュッフェスタイルにし、座席も決めない。
食卓をどう彩るかを大切にしたとき、「選ぶ」場面に思考が生まれる。
企業の取組として職員の座席が決まっていない。ルールとして毎日違う席に座る。上司との位置関係や電話を取る回数など様々考慮して座る必要がある。

・シンプルな課題環境設定がよいのではないか。「モッツァレラチーズを作る」という単純な目的を示した事業をしたことがあるが、参加者が積極的に活動する姿が見られた。

・世代に合った難易度の課題設定も必要である。また、子ども自身による目標設定も主体性につながるのではないかと思った。

・川遊びの様子から、複数で行うことの効果として、1人での活動は飽きやすいが、複数での行動であれば、それぞれに集中力や粘り強さ、協力などが生まれ、遊び方も広がったり深まったりするのではないかと思った。

・生き物を自分の手で捕獲する経験は、子どもたちにとって素晴らしい体験になる。その際に、今回の川遊びであれば、サポートする高校生が捕獲のデモンストレーションを見せるのも、子どもたちの意欲を高め、主体性を引き出す揺さぶりにつながるのではないか。

・「～しなさい。～すればよい。」という大人の価値観や方法論を教えても、子どもに能動的な思考や主体性は育たない。子どもたちの内面にある考えを対話によって引き出しながら、実際の体験へとつなげてやるような大人の関わり方が必要ではないか。

・子どもたち自身が成功も失敗も含めた体験を創り上げていくことで、自信を深め、主体性を育てることへもつながるのではないか。

③ 対話を引き出す環境設定について

・場所や場面の設定（役割を区切る場）も大切になってくる。

・川遊びでは遊ぶ範囲が区切られ、川遊びから生き物の捕獲及び観察への場面転換が図られていた。野木委員は下流の門番となり、さらに活動範囲を広げるため、下流へ行きたい子どもは、野木委員との対話が必要となる。対話の結果、希望が叶えられ、子どもが自分の考えが受け止められたと感じれば、自分の言葉で伝えることで何かが変わることを学べる。それが、主体性や言葉の力、自らの自信、信頼関係にもつながる。

・自身の保育施設では、部屋の一角にある畳の上を対話する場所と決めている。それまで喧嘩していた子どもたちも畳に行くと対話の場面であると自ら認識し、お互いに対話を始める。

・火起こしの場面も対話の場面になっていた。マッチで火を点けるときに、誰から点けるのか、マッチがなくなったら誰が借りてくるのかなど、誰かが役割を担う場面で対話が生まれる。

非日常体験を日常体験での自立へつなげるために必要なものは何か？
・主体的な思考を生む環境設定の「余白」
・シンプルな目標設定・世代に合わせた課題設定・自己による目標設定
・対話を生み出すための場所や空間の区切り・場面転換・役割の設定

6　指導助言（杉岡顧問）

（1）　体験による学習

・火起こし体験など、元々もっている知識だけでは上手くいかないことがある。アンラーン（学びほぐし）が必要であり、それは自立にもつながるのではないか。
・自然体験によって、「ご飯を炊く」とはどういうことかという言葉の背景や意味への気づきが促される。
・雷の音一つとっても、近づいてきたら撤退するのだという学びがある。
・小さな失敗は体験となり次に生きる。自立を目指す上で、こういった体験を邪魔してはいけないのではないか。

（2）　スタッフ、高校生、子どもたち、それぞれのコミュニケーション

・縦の教え合い、学び合い、それぞれの世代での二重、三重の振り返りが次へつながるではないか。
・参加させた親がどう感じているのか、ということにも目を向けたい。

・体験によって得られる様々な学びの再確認
・アンラーンとリフレクションの重要性